レイエスは誰のものか。

2019年の”クラブ化”を皮切りに、カテゴリーを積み上げ、活動領域を広げ、様々な仲間が増えていきました。関わる人の数でクラブのスケールを測るなら、それは確実に大きくなっていったと言えます。

その過程において、クラブの”公共性を高めること”は私自身念頭に置いていたことですし、ビジョンを体現すること、事業の機能を果たすことという観点では、一定の成果を評価できると思います。

一方で、新しくなっていくこと、変化していくことと引き換えに、変えてはいけないものを維持する思考を併せ持つことの難しさや、クラブの意思の所在を守ることの責任について痛感、認識させられる場面も増えていきました。

柔軟でオープンでチャレンジングな姿勢を保ちつつ、ある部分では保守的で頑固で物事をクリティカルに捉えることのバランスと判断を常に求められる。そんな矛盾性を受け入れてその中で自身をコントロールするという、まさに志し高くフットボールをプレーするような、そんな感覚を味わっています。



そんな過程の中で、先人たちの思いに対する敬意や、これまでの積み重ねに対する責任感から、時に「クラブは自分に委ねられている」と感じる瞬間がいくつもありました。もちろんこれも部分的には正で、部分的には誤であると気付かされます。

意思を司ることや何か行動を起こすために必要な力、安心してクラブが日常を過ごせること、、、どれもが自身と他者との共存で成り立っており、まさにクラブとは誰かだけのものではなく、すべての人に対してそれぞれの価値をもたらせる存在なのです。



とある感謝はしているけど尊敬はしていない（笑）先輩が、よくこんなことを言っていました。

「サッカーとミスチルは何でも教えてくれる」と。

そんな言葉を意識してきたわけではありませんが、まさにレイエスは「変わらないために変わっていく」ことがいつの間にか信条となっていったクラブです。ミスチルさんもそんな思いが込められた作品が多いですよね。

レイエスのそれは進化論やそこからくるアカデミーの育成目標などにも精通する哲学でありますが、長くなるのでまたの機会に。

フットボールとは人生である、は本当か。



そんな矛盾や進化、物事の本質を教えてくれるフットボールですが、よく人生に例えられるのは皆さんも見聞きしたことがあるのではないでしょうか。

我らの師であるロサーノさんも「We prepare for Futsal, Football and Life」という言葉をアカデミーフィロソフィーとして与えてくれました。

両者に通じる側面があることは間違いなく、あらゆる感性を養うことや成功と失敗からの学び、時に不条理さで成り立つフットボールのゲームは、世の中の縮図のような表情を見せることも珍しくありません。フットボールを経験する中で蓄積されていくあらゆるスキルや人との繋がりは、その後の人生において有益なものになることは紛れもない事実だと思います。

ただひとつ決定的な違いがあるとすれば、人生には結果の正解がないことです(最期の時までプロセスとも言えますが)。素晴らしい人生、幸福は人の数だけ存在するため、「良い人間」の定義も困難です。フットボールはゲームなので、結果の正解は勝つことであり、楽しむこと。そのためのプレーが良いプレーであり、それをできるのが良い選手です。

レイエスは、それぞれがクラブを通して人生の正解を見つけるヒントを得て、そこに自身の定義をもってもらうことを目指しています。そして人生もフットボールも結果の正解に至らなければ無意味であるか？と問われた際に、胸を張って否定できるようになること。

人生のプロセスの正解を学び、そこに自身の解釈を持つこと。

それが我々の言う「良い選手は良い人間である」の本当の意味かもしれません。

東急SレイエスFC
代表　阪本 洋平